

『源氏物語』における「中の品」女性論 ——「葎の門」を手掛かりに

北京外国語大学
馬如慧

物語音読論に基づいて「雨夜の品定め」が享受される場面を想像してごらん。物語享受の場において、語り手・物語・聞き手の三者が欠かせないが、女房（語り手）が享受の主体である姫君（聞き手）に自分の評（草子地）を加えながら物語を語り、なんとその物語自体が男性のみが存在する物語享受の場ではないか。物語とは、元々世間話の意味を持ち、頭中将・左馬頭・藤式部丞（語り手）の三人が、光源氏（聞き手）に女性論（物語）を語り続けることで、男性のみに構成される物語享受の場が生成されていくわけだが、なんとその享受の客体たる物語がまた女性論議である。このように、「雨夜の品定め」は、女性作者が女性享受者を意識しつつ創作した男性のみが存在する女性論議の場であることで、その異質さが自明であろう。いままで、「雨夜の品定め」の位相について、藤岡作太郎氏の「源氏物語の本意は実に婦人の評論にあり」という物語全体の総序的機能を見る視点¹と阿部秋生氏の帯木系に展開する源氏の中の品の女との情事を導く機能を重視する視点²が代表的である。その両視点の有効性を否めないが、「雨夜の品定め」は総序的機能なり伏線的機能なりを果たす同時に、男性視点の女性論として、女性の内面的描写が豊かである『源氏物語』全編とは対照的であるといえよう。本論文において、「雨夜の品定め」における「葎の門」に隠れ住む女性を糸口に、「雨夜の品定め」の女性論議の特異性を論じたい。

¹ 藤岡作太郎、『国文学全史平安朝篇』、東京開成館、1905年

² 『源氏物語研究序説』、東京大学出版会、1959年